

課題研究部門③子どもの健康・安全
生きる力を育む炊き出し訓練

社会福祉法人喜慈会子中保育園 桑田幸生・野村美樹・伊藤千晶・大塚裕子
社会福祉法人喜慈会 大塚貴史

1. 背景と目的

2017年度から子中保育園では人員体制が一新し、理念や方針、子どもに願う姿、方針に基づく保育活動も大きく変わった[伊藤 2019]。この変化の中で組織としての防災活動の一つである毎月の避難訓練も、「子どもたちに避難行動をさせる訓練」から「子どもが避難の重要性を認識した上で自ら行動する訓練」へと方針や内容が変わっていった。また、避難訓練を含む防災学習の一環として、2017年度末に消費期限を迎える災害用食料備蓄品の廃棄を避けるため、それらの食品を使って炊き出し訓練を行うことにした。この炊き出し訓練も、避難訓練と同様、子どもたちが自ら考えて行動する実践になることを目指した。また、保育者にとっては、1) 子どもたちが自ら考えて行動することを目指す訓練をデザインし実践する、2) 実際の災害時炊き出しの課題を浮き彫りにする、という二つのねらいが想定された。

本稿では、避難訓練の方針同様に、「子どもが訓練の重要性を認識した上で、自ら行動する訓練の実施を目指す」ことを大きな目的として、2017年から2021年までの5回の炊き出し訓練について、各年度の実践のねらいと内容、考察として実践で得られた課題を次年度どのように解決したかについて示す。なお、本稿の内容は、保育日誌および炊き出し訓練の記録に基づき記述している。

2. 炊き出し実践に関する検討と課題

震災、台風被害、土砂災害などの被災後、被災支援活動のひとつとして災害時炊き出しの重要性が指摘されている[小野寺 2015]。炊き出し実践については、災害時炊き出しに必要な食糧備蓄品と、調理、栄養、衛生、被災者の心理などの各側面に関する課題が検討されている[坂本 2011]。坂本らは、災害時に水道、ガス、電気などのライフラインがどの程度利用できるかにより、炊き出し実践にどのような準備が必要かを示している。とくに、水については飲料水、調理用水、洗浄用水など大量の水が必要になると指摘している。当園の現在までの炊き出し訓練では、調理用水のみを備蓄水で対応している。電気やガスについては利用できないことを想定し、調理熱源を備蓄用の炭による焚火としている。

小野寺らは、所属する大学が災害発生時に避難所の役割を担うことを想定したうえで、災害支援の研修として災害時炊き出しを企画、実践している[小野寺 2015]。しかし、訓練ではあるものの、実践時間が限定されていることや、不特定多数の参加者に興味を持ってもらうことから、ホットドッグなどの簡単な調理を訓練メニューとしている。当園の炊き出し訓練では、子どもたちや園児の給食代わりになるかもしれないことや、場合によっては近隣の方々にも提供が必要があること、かつ、炊き出しを担う当事者である職員と園児が訓練でも被災時でも変わらないことから、備蓄食料を利用して米を炊き、汁ものを作るという炊き出し調理とした。

一方で、炊き出し実践は、子どもたちにとっては防災学習として体験から学ぶという意義もあ

表1 過去5年間の炊き出し訓練の取組み

実施年度	ねらい	子どもたちによる 炊き出し活動の内容	炊き出しメニュー
2017 (2018.2.22)	○初めての試みとして屋外調理による炊き出し訓練を実施することにより課題を把握する ○子どもたちが積極的に役割を担えるようにし、炊き出し訓練の意味を体験的に学ぶ	○事前学習(2/19 地震でライフラインが止まることについて) ○炊き出し ・米を炊く ・レトルトカレーを温める ・みそ汁を作る	炭火炊きご飯 レトルトカレー みそ汁(白菜、青梗菜)
2018 (2018.12.19)	○子どもたちが畑で育てた野菜を収穫し、調理素材にすることにより、緊急時における自給自足を試みる ○子どもたちが被災時にどのような環境でも排泄ができるような体験をする	○事前学習(12/14 家具の倒壊やガラス等の飛散について) ○畑の野菜収穫 ○炊き出し ・米を炊く ・みそ汁を作る ○畑での排尿体験	炭火炊きご飯 みそ汁(白菜、青梗菜)
2019 (2020.2.3)	○子どもたちにも影響が大きかった台風水害について、子どもたちの避難体験も踏まえて被害を学ぶ ○使い捨てができる食器の食べにくさもある紙製食器を作って試してみる	○事前学習(11/21 台風による水害) ○畑の野菜収穫 ○紙製簡易食器の作成 ○炊き出し ・米を炊く ・みそ汁を作る ○紙製簡易食器で食べる	炭火炊きご飯 みそ汁(小松菜)
2020 (2021.3.24)	○コロナ禍における炊き出し訓練としてレトルト食品(ご飯)を利用し、加工することにより保存食となることを知る	○事前学習(2/25 模型を使って家が崩壊することのしくみを伝える) ○畑で野菜収穫 ○炊き出し ・煎餅づくり ・みそ汁を作る	煎餅づくり(レトルトご飯を温めた上で薄く延ばして焼いたもの) みそ汁(大根)
2021 (2021.9.16)	○より誰でもが調理できることを目指し、飯盒炊きを実践する ○2歳児、3歳児、4歳児が自分で危険物を避けて避難する訓練をすることにより自主的避難の意識を高める	○事前学習(9/15 物の倒壊や破損、飛散について) ○野菜収穫(小松菜) ○炊き出し ・米を炊く ・みそ汁を作る ○子どもたちが自分で判断して行動する避難訓練(4歳児以下)	飯盒炊きによるご飯 みそ汁(子どもたちが栽培したシイタケと小松菜)

る。大阪府の町立中学校の家庭科教育の取組みとして行われた炊き出しの企画実践は、文

化的実践の学びとして位置づけられており、長期間のプロジェクト学習として、経験者からの話を聞き、生徒自身が炊き出し会の企画や、炊き出し料理のメニュー、調理方法を計画し、調理実践している[忽那 2010]。保育所での実践においても、炊き出しの意味を事前に伝えること、準備や調理、片付けの過程で子どもたちも役割を担うことが重要と考えている。

以上の検討を踏まえ、当園での炊き出し訓練では、実質的な避難訓練と防災学習の二側面を持つものと位置づけ、毎年企画実践している。

3. 炊き出し訓練の取り組み

2017年度から2021年度までの5年間の炊き出し訓練の概要を表1に示す。2017年度に始めた炊き出し訓練は、毎年、保育者が取り組んでみたいこと、かつ、前年度の課題を解決することを追加修正しながら進めた。2018年度以降の取り組みでは、表1の中で下線部を引いた活動が追加修正の活動内容に相当する。2017年度の事前学習と炊き出し実践は初めての試みで、以降の基準となるため下線対象としている。

本節では、表1中の下線部の活動内容について詳述することにより、開始から5年に渡る取り組みの全容を示す。

3.1 2017年度の取り組み

2017年度の炊き出し訓練の試みは、次年度以降の基準となった。表1に示すように、屋外調理による炊き出し訓練の実行可能性と、実施時の課題の把握が保育者にとって2017年度の目的であった。子どもたちにとっては、炊き出し実践に積極的に関わりながら、炊き出し訓練の意味を体験的に学ぶことが目的であった。これらの目的は十分に達成され、とくに子どもたちの協同的な体験への参加は、図2の写真にも示すように、子どもたちにより自主的に、積極的に行われた。

(1) 事前学習



図1 2017年度事前学習

図1は事前学習の様子である。事前学習のねらいは、なぜ炊き出し訓練が必要なのかを子どもたちが理解することであった。図1は4、5歳児を対象に、震災時に水道、ガス、電気などのライフラインが止まることについて写真や絵を見せながら保育者が話をしている様子である。ライフラインが止まることにより、どのようなことが困るかを問うと、水や電気が使えなくなることを指摘する子どもがいた。また、「地震で物が倒れたり、壊れたりして道路が通

れなくなったらママはどうやってお迎えに来るの？」「給水車の水が無くなったらどうするの？」などの質問が出た。以下に示すのは当日の保育日誌の記述である(下線は筆者による)。

保育日誌より(2月19日 4、5歳児クラス)

木曜日に行う炊き出し訓練とは何か、どのような事するのかを、絵や写真を見ながら説明を聞く。写真や絵を見る事でイメージしながら、保育士が質問したことに対し、自分の言葉で発言していた子どももいた。また、災害について理解したからこそ「怖い」と言葉に出していた子どももいたが、「先生がいるから大丈夫だよ」と声を掛けると安心している様子だった。(略)



① 道具の水洗い



② 湯沸かし、火の調節



③ 米の準備



④ 米の計量



⑤ 米洗い



⑥ 給水



⑦ 火の調節



⑧ みそ汁の具材準備



⑨ レトルトカレーの温め準備



⑩ みそ汁づくり



⑪ みそ溶き



⑫ 味見



⑬ ご飯の炊きあがり



⑭ 配膳

図2 炊き出し調理のプロセス

震災を「怖い」と感じたのは、適切に被害事実を事実として理解できたからだと考える。「怖い」と言語化できなかった子どもたちの中にも不安感を覚えた子どもはいたかもしれない。担任

の応答は当該の子ども以外にも適切だったと考える。

事前学習のねらいが子どもたちに伝わったことが分かるエピソードがある。5歳児 A の母が事前学習の日の帰宅後、Aに向かって「明日の炊き出し訓練、楽しみね！」と声をかけると、Aは「楽しみじゃないよ。訓練だから真剣にやるの」と答えたとのことであった。実際に A は炊き出し実践に対して、友だちと協調しつつ楽しそうに話しながらも真剣に取り組んでいた。

(2) 炊き出し実践

2017年度の炊き出し訓練は、初めて屋外調理を行った。2017年度以降も、この流れが基本になるため図2に詳しく示す。

4、5歳児は調理過程に参加するため、事前に、体調が悪い子、手指にケガのある子は参加できない旨を子どもたちや保護者に伝えた。炊飯とみそ汁の味付けは5歳児に、みそ汁の具材となる野菜の準備は4歳児に仕事を任せた。屋外調理自体、初めての子どもも多く、ふだんは、はしゃいだりふざけたりする子どもも、緊張気味に真剣に取り組んでいた。

図2③⑤⑪に見られるように、子どもたちは保育者からの指示がなくても、一人でできないことは声を掛け合い、重い物は協力して運ぶことを行っていた。5歳児はとくに、図2②⑦に示すように、日常的には行わない炭火の扱いについても、慎重に丁寧に行っており、時折、事前学習で学んだことを「電気とか使えなくなるから炭の火でご飯つくるんだよね」のように言葉にし、「地震がきたら、みんなでご飯つくらないといけないから真剣にやるんだよ」「うん、知ってる」のように友だちと話しながら作業していた。

当日の子どもたちの様子は、保育日誌にも記録されていた(下線は筆者による)。下線①②は、それぞれ協調性や主体性を示す言動であり、下線③は日誌の中で担任も指摘するとおり、事前学習の内容を理解したからこそその発言と考える。

保育日誌より(2月19日 4、5歳児クラス)

年長組は主に炊飯と火の元の作業をする。お米の研ぎ方は「爪は立てないんだよ」と①お互いに知っていることを教え合い、二人一組になると役割分担をせずとも自然と協力し合いスムーズに米とぎを進める。その後の作業も②自分で仕事を見つけて動き、自分の手が空くと年中やひまわり組の作業にも「何か手伝うことある？」と聞いて回り意欲的に取り組んでいた。

米とぎの際に水道をひねって水が出るところを見ると③「なんだ、今日はお水出るんだ！」と驚いていて、事前学習の時の学びが根強く残り、子どもたちの中で学びとして受け止められていることがわかった。友達同士でみんなが経験できるようにローテーションで作業を行い、「まだ〇〇ちゃんやってないよね」と声を掛け合う姿に、相手への思いやりや周りを見る力がついたことを感じた。とくに目立ったリーダー格の子がいなかったので指示されることがなかったこともあり、それぞれの力や良さが出ているように思う。卒園の前に成長した姿が見られてとても嬉しく思った。

記録や日誌に残されている子どもたちの言動に見られるように、2017年度のふりかえりでは、事前学習の重要性が再認識された。また、被災時には店に野菜を買いに行けるわけではないため、野菜などは畑で栽培して利用したい、そのために日ごろから畑活動を保育に取り入れていきたいという声も上がった。

3.2 2018年度の取組み

2017年度のふりかえりをもとに、2018年度は事前学習を強化した。炊き出し実践については、栽培した野菜を活用するため、子どもたちと共に年度の始めから、農作業にも注力した。また、断水時の排泄体験のため屋外に仮設トイレを設置することにした。

(1) 事前学習

2017年度の炊き出し訓練を中心的に企画、実践していた桑田が防災研修に参加し、その折の学びを活かして、事前学習を改善した。前年度のライフラインに関する学習に加え、子どもたちが自分の頭を守るための「ダンゴ虫ポーズ」を取り入れ(図3①②)、家具などが倒壊して自分が下敷きになるかもしれないことを共有、体験し(図3③④)、窓ガラス等が割れて飛散した際のイメージを、卵の殻を割り素足で踏むことにより疑似体験する(図3⑤)といった事前学習を計画、実践した。また、ライフラインの説明の際、水道が止まってしまうとトイレも使えなくなることを伝え、翌日の炊き出し訓練では畑で排泄することを伝えた。



① 身を守るダンゴ虫ポーズ



② ダンゴ虫ポーズの実践



③ 家具の倒壊イメージを共有



④ 倒壊イメージを体験



⑤ 卵の殻でガラスの飛散イメージを体験

図3 2018年度事前学習

(2) 炊き出し実践

2017年度のふりかえりで、1)被災時には店に野菜を買いに行けるわけではないため、野菜などは畑で栽培して利用したい、2)保育園のトイレが断水で使えなくなった場合に備え、子どもたちが屋外でも排泄できるようにしておきたい、といった課題が上がった。これらは、2017年度の問題点ではなく、むしろ、被災時の現実的な課題として提案された。2018年度は、この2点を実現するため、園の畑で栽培していた青梗菜と白菜をみそ汁の具材に利用し(図4)、畑の中で栽培エリアと離れた場所にテントを張っただけの仮設トイレを設置し子どもたちが利用する(図5)よう促した。

2018年度も役割分担は、5歳児が炊飯、4歳児がみそ汁の準備として野菜の収穫、洗う、千切って細かくするといった作業を担当した。畑の活動は、2018年度の初夏から始めているため、子どもたちは収穫にも慣れており、丁寧に洗っていた。4歳児 B は、他児が飽き始めた際も、使う野菜をすべて洗い切るまで一人で仕事を続けていた。B の姿を見て、また作業にもどってきた子どももいた。

仮設トイレでは、図5①のように外部から見えなように柱を低くしてテントを張った。テント内にトイレットペーパーと消毒用手拭き、土を掛けるためのスコップを用意した。このテント内で、子どもたちが自分で穴を掘って排尿し、排尿後に土をかけ(図5②)、手を拭いて出てくるという過程を子どもたちが体験した。訓練に戻る際には園庭の水道で再度手を洗った。この体験については拒否する子どもがいれば強制しない方針であったが、子どもたちは取組みのねらいをよく理解しており、4歳児、5歳児は全員、屋外での排泄を体験した。トイレテントから出ると「地震でお水が出なくなったらトイレも流せないよね」「土をかけないと臭くなっちゃうからたくさんかけた」のように、感想や意見を述べていた。なお、屋外での排便の処理は子ども自身にとって難しさもあり、保育者の手が十分でないこともあるため、園舎内のトイレを使用することにした。

2018年度実践のふりかえり時、屋外トイレは、子どもたちにとっても保育者にとっても体験としては貴重であったが、実際の被災時には、重量のあるテントの組立てや設置が時間的、体力的に可能であるかどうかという懸念が出た。2021年現在、伸縮式の簡易テントをブルーシートで被うといった案は出ているものの、まだ実施は試みていない。実際の断水時には、2018年度の仮設トイレは必要な対策となる可能性もあるため、試みとしては重要であった。2018年度に行われた畑の野菜を利用する試みについては、今後も継続していきたいと保育者からの賛同があったため、次年度も継続することにした。

子どもたちの姿としては、積極的に活発だった昨年度の年長の卒園後、2017年度同様に



図4 畑で栽培していた青梗菜と白菜を収穫し洗う



① 畑の屋外トイレ

② おしっこの後に土を掛ける

図5 屋外トイレの体験

子どもたちが自主的に炊き出し訓練に参加することができるかどうかを事前には懸念していた。しかし、2018年度も子どもたちは、「こっち終わりました！次は？」や「自分のが終わったから年中さんのお手伝いしてもいい？」のように、保育者が指示をしなくても自分から積極的に仕事を見つけて取り組んでいた。その様子が当日の保育日誌にも記述されている。

保育日誌より(12月19日 4、5歳児クラス)

年長はお米を炊く。以前行っていたお米とぎ当番の手順を思い出しながらスムーズに行っていた。また、自分達で役割を決めながら取り組む姿勢もみられた。(略)

また、炊き出し訓練における子どもたちの生き生きとした様子は、年下の子どもたちにも影響を与えており、以下の日誌のように参加意識を促していた。

保育日誌より(12月19日 2歳児クラス)

炊き出し訓練で味噌汁チーム(4歳児クラス)を見学していたちゅうりっぷ(2歳児クラス)の子どもたち。じっと4歳児たちの様子を見ていた。「やってみたい」という様子が伺えるので、少しだけ青梗菜をちぎってみよう促した。給食時には「これ、こうやったの(ちぎる動作)」と満足げに話す。お味噌汁を何杯もお替りしていた。「自分で作ったの」と誇らしげに話していた。

炊き出し訓練ではあるが、畑の野菜を使用するという食育の一環にもなっている。(略) 子中保育園の柱となる畑活動を取り入れながらの活動はとても良かった。

炊き出し訓練は、4、5歳児が中心となる活動であるが、2018年度からの提案である畑の野菜を活用する取り組みを「食育の一環」と捉え、異年齢の子どもたちにとっても学びの側面があることを2歳児クラスの担任保育士が指摘している。2017年度のふりかえりを2018年度に活かし、炊き出し訓練に留まらない保育活動の土台と認識していることが分かる。

3.3 2019年度の取り組み

2018年度のふりかえりにより、2019年度は屋外トイレを実施しないことに決めた。例年通りの屋外調理による炊飯とみそ汁づくりを行い、みそ汁の具材となる野菜は畑で収穫した小松菜とした。2019年度の新たな試みとしては、使い捨てのできる紙製食器を、新聞紙とビニール袋で製作してご飯を食べる体験をした。

2019年度は台風被害の大きな年であり、園舎は被害がなかったものの、保護者や職員の中には、公民館や体育館などの避難所に避難した家庭もあった。また、社会的にも台風被害が大きく取り上げられ浸水被害や土砂崩れのニュースを子どもたちもよく見ていた。そこで、事前学習では台風水害について学ぶことにした。

(1) 事前学習

過去2回の事前学習は震災についてであったが、2019年度は、写真や絵を用いて水害について説明し(図6①)、簡易的ではあるが土砂崩れのメカニズムについて盛り土とじょうろの水を用いて実験的に示した(図6②)。

事前学習では初めて扱った水害テーマに、子どもたち、とくに5歳児からは様々な考えや疑問が出た。また、土砂崩れについては日頃の泥んこ遊びの体験も相まって、土の山が多くの



① 水害を説明する

②土砂崩れを可視化する

図6 2019年度事前学習

水を吸収することによって崩れてしまうことを体感した。その際の会話や事前学習後の言動が日誌に残されているため以下に示す(下線は筆者)。子どもたちが事前学習をどのように捉えたかがよく示されている。また、子どもたちの健康や安全の土台となる学びの本質が示されているとも考えるため、長いが引用する。

保育日誌より(11月21日 4、5歳児クラス)

来週の炊き出し訓練の事前学習を行った。以前の台風被害について話を聞く。写真や道具でイメージを持ちながら話を聞いた。質問や発言は主に年長が積極的にしていた。5歳児Cは、救命ボートでの避難について強く関心を持つ。

5歳児 C「もし逃げ遅れちゃったら木も高いから(登れば)安全なんじゃない？」

保「でも水に沈まないのかなあ？」

すると、事前学習の後、戸外に出て、自分達で道具(大きな容器、水、木の枝、石、スコップ等)を集めて実験を始めた。水に木の枝を浮かばせると浮くことが分かる。

5歳児 C「浮いたね！でも人間が乗るんだからそのくらい重い何かのせないと！そうだ！石がいいんじゃない？」

同じく5歳児のDとEと一緒に探す。何回か木の枝に乗せるが、落ちてしまう。

5歳児 C「きっとバランスが悪いんだよ！同じ体重の石を見つけないと！」

5歳児 D「たしかに、大きい石のほうがいいよね」

それぞれ手分けをしながら大きな石を見つける。地面に埋まっている大きな石を見つけて取ろうとするが、なかなか取れない。CとDで水を運び始める。

C「土は水に弱いから(埋まっている石が)取りやすいんじゃない？」

D「そうだね！さっき(事前学習で)言ってたしね！」

事前学習の内容から少し話がそびれたように感じたが、Cの疑問から展開した。実験を行なっている際には、事前学習で学んだことを復習しているような会話が続いた。この会話から事前学習のことを理解していると確信した。

日誌に示されている子どもと保育者の会話や、子ども同士の会話や言動は、一見多方向に広がっているように見えるが、下線部の発言を見ると一貫して事前学習での学びを言葉にしていることが分かる。日誌にも保育者の同様の気づきが示されている。

2019年度の炊き出し訓練は、当初、事前学習の一週間後を予定していたが、天候不順や行事の予定から日程が大幅に延期し、年明け2月3日に実施した。

(2) 炊き出し実践

被災時の断水の際には、食器等も洗えないため、2019年度の初めての試みとして、新聞紙やチラシで大きめの折り紙コップを作成し(図7①)、それをビニール袋で包んで簡易食器とした(図7②)。ご飯とみそ汁は例年通り、屋外調理としたが、主菜と副菜は給食室で調理してくれることになった。

炊き出し訓練は、その活動の内容から、どうしても年上の子どもたち中心の活動になってしまいが、2019年度の紙製の簡易食器の作成では2、3歳児の子どもたちも参加することができた。下記日誌の下線部(筆者による)に示すよう、子どもたちに参加意識が沸くような活動デザインおよび実践をすると、他の活動への展開も見られるようになる。

保育日誌より(2月3日 2歳児クラス)

3、4歳児に加わり、ご飯を入れる為のお皿作りに参加する。(略)完成したたくさんのお皿を見て満足そうに給食の話を始めていた。年長児が作ったご飯を見に戸外にいくと、鍋に入ったご飯を見て不思議そうにしていた。炭から炎が上がっている様子も観察し、「赤いね！」と興味を示していた。

給食でチラシのお皿の中に入ったご飯を食べると、いつもとの違いにはじめのうちは戸惑った様子だったが、上のクラスの友だちが食べる様子を見て真似をしながら食べていた。

保育日誌より(2月3日 0、1歳児クラス)

炊き出し訓練を見学する前に、火を使っている事を伝え、注意事項を話してから見学に行った。もも(1歳児クラス)の子供達は保育士としっかり手を繋ぎ、薪で炊いているご飯鍋を見ていた。たんぽぽ(0歳児クラス)の子供達は、散歩車に乗って参加したのだが、ご飯を炊いている事を伝え、「まんま」と言いながら指差しして、興味を示す。その後、園庭で砂遊びをしたのだが、Hはままごと用の鍋に砂を入れ、「ぽぽちゃん(人形の名前)のご飯、焼いた」、「あちちっ」と話しながら遊び、Fは「やけどするよ」等、炊き出し訓練で覚えた事を遊びに取り入れていた。

見学前に、丁寧に分かりやすく、炊き出しについて話をすると、もも、たんぽぽの子供達なりに、真剣に興味深く見学する姿が見られた。また、話した事をよく覚えており、次の砂遊びにも繋がった事に、HとFは経験が積み重なっているのだと感じた。

炊き立てのご飯も見ることができ、また、新聞紙とビニールを利用した災害時用の器を使用した事により、物珍しさを感じたのか、昼食時の白飯の食べが、いつもよりとても早かった。体験の大切さを感じる。



① 新聞紙とビニール袋で簡易食器をつくる



②簡易食器でご飯を食べてみる



図7 紙製簡易食器の製作と活用

簡易食器を使った4、5歳児は、「ご飯がビニールにくっついて食べれない」「〇〇はきれいに食べれたよ」「くっついたご飯もったいない」など言葉にしながら、ビニール袋についたご飯を最後までしっかりとこそげ取っていた。被災時には、いつものようにはいかないこと、不便なことが生じうる。炊き出し訓練では、事前学習と併せることで、「なぜ不便なこと、うまくいかないことが起こるのか」を学びつつ体験することに意義があるとあらためて感じた。

3.4 2020年度 of 取組み

2020年度はコロナ禍により社会状況が一変した。どの保育園でも同様と思われるが、活動や行事の縮小、中止が余儀なくされた。炊き出し訓練についても実施を検討したが、災害はいつでも生じうることから例年通りに実施した。

しかし、2020年度は趣向を変え、ご飯についていつものように巨釜で炊くのではなく、ご飯を薄くして醤油を塗って焼くことにした。これは、4歳児の「おせんべいって、どうやって作るん



① 建物の揺れを可視化する



② 揺れた家の中を示す

図8 2020年度事前学習



① ご飯を潰して整形する ② ご飯を焼く ③ 醤油を塗りながら焼く ④ 煎餅風の焼きおにぎりを食す子どもたち

図9 煎餅風焼きおにぎりを作る

だろう？」という一言から始まった計画だった。

(1) 事前学習

2020年度の事前学習は、2018年度以前に行われていた震災被害にテーマを戻し、ライフラインが止まること、家具が倒れ、物が落ちてくること等について学んだ。2020年度の新しい試みとしては、建物の揺れや倒壊のイメージを、段ボールの手作り構造物を使って可視化したことである(図8①)。これにより、揺れが大きいと建物や、建物の中にある物が倒れることについてイメージを持ちやすくなったと考えられる。

(2) 炊き出し実践

おやつに出された煎餅を見ながら素材や作り方に興味を持った子どもの言葉から、2020年度の炊き出し実践では、炊いた米を潰して(図9①) 薄く焼き(図9②) お醤油味にして(図9③) 煎餅風の食べ物を作ることにした。煎餅にすることで、保存食としての意味も加わり、炊き出し実践には向いていると考えた。巨釜で炊いてから整形して焼くのは時間がかかるため、レトルトご飯を利用することにした。

2020年度の炊き出し実践は、保育日誌にもあるように、子どもたちは煎餅づくりの作業や完成した味を楽しんでいた。

保育日誌より(3月24日 4、5歳児クラス)

学年によって活動を分けて炊き出し訓練に参加する。さくら(4、5歳児クラス)はせんべい作り、ひまわり(3歳児クラス)、ちゅうりっぷ(2歳児クラス)は味噌汁づくり。さくらは保育士の説明を聞いて袋に入った米を形がなくなるまで押しつぶす。形が崩れてくると保育士に「どう?」「できた」と見せにきて、「もうお米の形なくなったかな?」と問いかけると自分の米を観察してまた潰す。(略)外に出て鉄板に乗せ醤油をかけると「いい匂い」と話した。味見には「おいしい!」「焼きおにぎりみたい」「お醤油の味がする」「モチモチ」と年長。「おいしい」「お醤油」と年中が話していた。

一方で、下記の保育日誌にもあるように、平らにした米を焼き、醤油を塗る工程はすべて保育者が行ったため、例年に比べて子どもたちの実践参加が少なくなったことが指摘された。

保育日誌より(3月24日 2、3歳児クラス)

ちゅうりっぷ組(2歳児クラス)、ひまわり組(3歳児クラス)は、畑から収穫してあった大根を洗い、味噌汁に入れられるように準備をする。(略)

今回は準備としては活動に入っていたが、実際に作る場所は殆ど保育者が行なう形になっていた為、子ども達は見ている時間が長く、自分たちで進めていくような感覚ではなくなり、あきてしまった児もいた。

実践後のふりかえりの際にも、食育要素が中心的になり、炊き出し訓練で重視していた「楽しむ」よりも「真剣に取り組む」の原点に戻った方がよいのではないかなどの意見が出ていた。

3.5 2021年度の取組み

2021年度の取組みは、2020年度のふりかえりをもとに、炊飯とみそ汁づくりの基本に戻したが、誰もがより手軽に取り組めることを目指して、ご飯は飯ごうを購入して炊くことにした。また、みそ汁の具材として、3歳児が育てたプランター栽培の小松菜、パッケージ化された原木栽培のしいたけを活用することにした。子どもたち自身が育てた食材を多く使うことにより、「じぶんごと」の意識を高めるためである。また、5歳児が屋外調理を担当している時間に、4歳児以下の子どもたちがどのように過ごすかについては、これまで課題であったが、その時間を「自分で判断して行動する避難訓練」という活動に充てることにした。

(1) 事前学習



図10 2021年度事前学習

2021年度初めて試みる「自分で判断して行動する避難訓練」の際に必要なため、例年の事前学習よりもさらに、地震の折には物やガラスなど危険物が床や道路に飛散してケガをしやすい状況であることを、東日本大震災の写真を使って丁寧に伝えた(図10)。そのような状況の中、踏んでケガをしないよう歩いて逃げる練習をするためである。「大きな地震が起きたときにどんなことが起こると思う?」と問うと、子どもたちから「冷蔵庫が倒れる」「電気が割れて落ちてくる。窓とかのガラスも割れる」

などの意見が出た。

(2) 炊き出し実践

2021年度の炊き出し実践では、事前に3歳児クラスの子どもたちは、シイタケ栽培を行い収穫したシイタケを冷凍保存しておいた(図11①)。また、小松菜はプランターで栽培し(図11②)、両方合わせて、炊き出しのみそ汁の具材とした。

2020年度は「楽しむ炊き出し」だったが、この活動の目的を見直し、「真剣に取り組む炊き出し」に方向性を戻した。また、子どもたちの仕事も増えたため、子どもたちが飽きることなく、友だちと協同しながら作業に取り組んでいた。大人にとっても初めての飯ごう炊き(図11③)でのご飯の出来上がりに子どもたちも喜び(図11③)、みそ汁づくりでは交替で味見をし、友だちと相談し合いながら味付けを決めていた(図11④)。みそ汁の味付けを担当していた5歳児たちは、年下の子どもたちがみそ汁をあまりお替りしないことを心配していた。



②小松菜のプランター栽培



③飯ごう炊さん



④シイタケと小松菜の味噌汁

①シイタケの原木栽培

図11 炊き出しのための野菜栽培と当日の実践

5歳児「あんまり美味しくなかったのかな？年長さんは全員お替りしたのに」
 保育者「シイタケが苦手な子が多かったのかもしれないね。たくさん入っていたから」

真剣に取り組んだからこそ、他児の反応が気になったのだと感じられた。

(3) 避難訓練

避難訓練は指示にしたがって行動することが重要な点では、必然的に受動的になりやすい活動である。しかし、避難行動の大前提には、子どもたち自身が危険を避ける、自分の命を守ろうとするといった意識が必要である。そこで、2021年度は2歳児から4歳児を対象に、物が散らばった場所で、子どもたちが自分自身で経路を探して素早く移動する、すなわち避難することに取り組むことにした。この活動のねらいは、子どもたちが園外でも卒園後も自ら避難行動を実践できる力を身につけることである。

具体的には、図12のように、保育室に散乱した玩具のブロックをガラス片に、段ボールを壊れた建物や落石に見立てて、回避し経路を見極めながら非常口まで進むもので、慌てず、か



①物が散乱した保育室



②各自、散乱した物を避けながら経路を見つけて非常口（窓）まで逃げる

図12 自分で判断する避難訓練

つ素早く動く必要がある。日頃の避難訓練では他児に付いていだけの子どももいるかもしれないが、このような練習をすることにより、保育者や他児に付いていくのではなく、自分自身で逃げるという意識を持つことを期待する。

結果としては、ほとんどの子どもが真剣に素早く非難行動をすることができたが、2、3名は非日常の雰囲気が楽しいことだと考えてしまう子どももいた。真剣に素早く行動できた子どもたちの中には、2歳児、3歳児であっても、段ボールの模擬落石の後に、他に移動できる道がないかと周囲を見渡し、他に危険が無いかと確認する行動が取れる子どももいた。この避難訓練は次年度以降も改善しながら継続していきたいと考えている。

炊き出し訓練の様子は、2021年度に限らず、実施後、玄関に掲示し、子どもたちの様子を保護者に共有している(図13)。このような情報共有により、2017年度に「楽しみじゃないよ。訓練だから真剣にやるの」という子どもの言葉を伝えてくれた保護者のように、家庭と保育園との対話を生み出すことにもつながっている。



図13 保護者との共有

4. 5年間でふりかえる ～考察に代えて～

執筆者の桑田、野村、伊藤、大塚の4名で、この5年間の炊き出し訓練の取り組みについてふりかえりの話し合いを行った。出た意見の概要を下記に示す(下線部は筆者)。

○毎年、前年の課題を整理し工夫しながら炊き出し訓練を行ってきたが、あらためて5年間を通してふりかえってみると、2017年度の子どもたちの主体的な取り組みが一番印象深い。これを子どもたちの特性の違いに依拠せず、デザイン、実践していくにはどうすればよいか。

○2年め(2018年度)のときに、子どもたちの豊かな経験よりも危険回避の意識の方がまさってしまったかもしれない。その結果、表面的には例年同じように準備や環境デザインを行っているが、子どもたちは大人の指示に従おうと主体的に行動しきれなかったのではないかな。

○次年度は、危険回避よりも豊かな経験をより一層重視し、子どもたちも積極的に火を扱えるグローブや長いトングなどを準備したい。子どもたちが自分たちで考えて行動できるように、夕涼み会(5歳児のみ対象の料理、食事会)で行ったように、最低限の段取りや注意点を紙に書いて掲示し、子どもたちにとって必要なときに自分で確認できるようにした方がいい。

○事前学習で、炊き出し訓練は何のために必要なのか、そのために何をしなくてはいけないか、どんな危険があるかをこれまで以上に伝えてもよいのかもしれない。それを一番伝えていたのは第1回め(2017年度)だった。だからこそ、関連する質問も多かったのではないかな。

○毎年、子どもたちにとっては初めての体験であるという意識が保育者に薄くなっていたのではないかな。考えてみると、企画担当になったとき「今年は何やろうかな?」と考えている自分がいる。子どもたちの特性に合わせた伝え方の変化はあってよいが、基本的には実施内容は毎年同じでよいと思う。

○少なくとも年長さん(5歳児)は数日前からの事前準備(道具を倉庫から出して洗う、備蓄品を出すなど)も含め、火の始末などすべてのプロセスを保育者と共に行うことが重要ではない

か。年長の姿勢が変わると、年下の子どもたちにも変化がある。そういう点では、2017年度だけでなく、今年(2021年度)も年長含め子どもたち全員に積極的な参加の姿勢が見られた。また、子どもたちが事前準備に関われば家庭でも話す機会が増え、保護者との情報共有もより一層増えると思う。

下線部はとくに重要と思われる箇所である。これらを包括的に見ると、子どもたちが炊き出し訓練を“じぶんごと”と考え行動するようになるデザインを考えることが重要であることをあらためて認識したふりかえりであった。

5. まとめ

子中保育園で行っている炊き出し訓練の5年間の取組みについてまとめた。4節に示したふりかえりの知見のように、次年度以降に向けての課題が明確になった。今度も、子どもたちが生き抜く力として必要な避難訓練や炊き出し訓練を実施していきたい。

参考文献：

- [忽那 2010] 忽那啓子, 文化的実践としての学びをめざして: 中学家庭分野「いつでもどこでも応援隊＜炊き出し応援隊＞」の開発と実施検討, 日本家庭科教育学会誌, 53(2), 120-125, 2010.
- [坂本 2011] 坂本薫, 澤村弘美, 災害に備えた食料備蓄と災害時炊き出し, ビタミン, 85(8), 430-436, 2011.
- [小野寺 2015] 小野寺泰子, 水谷好成, 小田隆史, 鶴川義弘, 福井恵子, 災害発生時の避難所運営を想定した炊き出し研修の実践, 教育復興支援センター紀要, 3, 99-106, 2015.
- [伊藤 2019] 伊藤千晶, 大塚裕子, 自己選択を重視したお別れ遠足のデザインと実践, 第13回保育実践研究報告集, 日本保育協会, 2019.